

「松本市における市民参加と生活・意識に関する調査」結果報告（簡易版）

2015年2月23日

信州大学人文学部社会学研究室 准教授 辻 竜平
学生一同

昨年秋に信州大学人文学部社会学研究室で実施した「松本市における市民参加と生活・意識に関する調査」にご協力いただきましてありがとうございました。この調査は、辻が指導し、学生とともに実施したものでした。この調査をもとに卒業論文を書いた学生たちが、調査結果をまとめたものを簡単にご報告いたします。

【調査の概要】2014年9月に、松本市民から1000人を対象として調査票を配付し、宛先不明などを除いた974人のうち576人の方から回答がありました（有効回収率59.14%）。性別は、男性265名（46.0%）、女性307名（53.3%）、平均年齢は55.82歳でした。

【松本山雅FCと地域への愛着】

地元チームを応援するほど、地元への愛着がわく。そんな言説が、疑うことなく信じられているように思われます。特に松本山雅FCは、2014年、J2での観客動員数が第1位となるなど、そのような言説を確かめてみるには、格好のチームです。そこで、松本山雅FCを熱狂的に応援するほど、ホームタウンである松本市に対する愛着がわくのかを検討しました。



図1 地元チームへの熱狂的な応援と地元への愛着

分析の結果（図1）、熱狂的に応援するほど、松本市への愛着がわくという関係は認められませんでした。一方、松本市の施設の充実や利便性、安全面で市を高く評価しているほど、女性よりも男性ほど、居住年数が長いほど、松本市に対する愛着を感じていることがわかりました。

ここで注目すべきことは、松本市のスポーツに関わる施設やイベントを高く評価しているほど、市への愛着が強いことです。つまり、松本山雅FCの応援が盛り上がることによって、アルウィンをはじめとする施設が整備されたりホームタウン活動がより充実すれば、愛着を間接的に高めることができる可能性があるのです。また、ファン向けの活動を充実させるだけでなく、サッカーを含むスポーツとの関わりが薄い人たちにもそれらの活動を知ってもらうなど、裾野を広げることも有効だと考えられます。

また、調査後に松本山雅FCのJ1昇格が決定し、市内ではもちろん全国メディアでも大

きく取り上げられました。これにより松本山雅 FC や松本市に対する市民の感情や態度、行動がどう変化していくのか、今後の動向にも注目です。

【生活習慣病の改善行動と人々のつながり】

「生活習慣病」の改善行動には、どのような要因が関わっているのでしょうか？ 「生活習慣病」は、自らの積極的な関与が重要で、本人の意識や行動が、病気の回復や悪化に大きく影響すると言われていています。そこで、人と人とのつながりが生み出す資源に焦点を当て、生活習慣病の改善行動との関連を検討しました。

まず、さまざまな地域の組織に所属することによって人と人とのつながりが生まれ、その過程で自分を助けてくれる人（協力的な知人）が増えたり、地域への信頼が高まると考えました。そして、そのような特徴的なつながりを持っている人ほど、お互いに生活習慣病について注意しあうようになり、生活習慣病の「危険性への認知」や「改善への意識」が高まり、ひいては、生活習慣病の改善行動が促進されるのではないかと考えました。

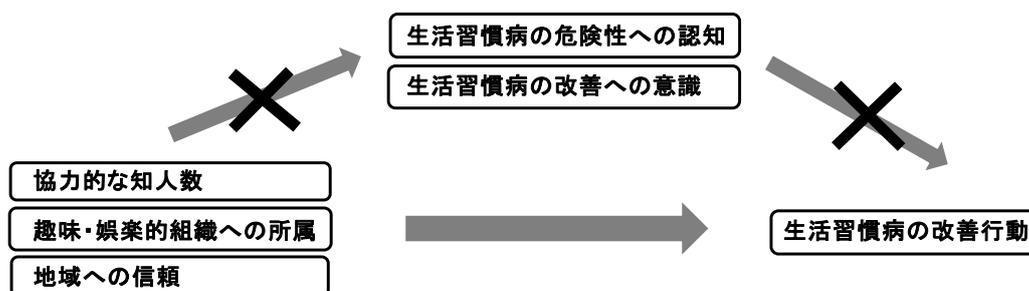


図2 人々のつながりと生活習慣病の改善行動

しかし、分析の結果（図2）、生活習慣病の改善行動には、人々のつながりが、生活習慣病に対する「危険性への認知」や「改善への意識」の高さを経て間接的に影響を与えるのではなく、「協力的な知人数」や「趣味・娯乐的組織への所属」、「地域への信頼」などの人々のつながりが、改善行動に直接的に影響を与えるということが分かりました。

この結果は、次のように理解できるでしょう。すなわち、人々のつながりによって、多くの情報や多様な機会が得やすくなったり、情緒的・物質的サポートが得やすくなったりするために、生活習慣病の改善行動が促進されるというわけです。

現在日本では、「健康日本21」という取り組みのもと、地域連帯を重視した健康政策が推進されています。この研究から、生活習慣病の改善行動においても、地域社会における人々との関わり合いが重要であることが明らかになりました。「健康日本21」の取り組みは、生活習慣病の改善行動を促すという点においても有効であると言えるでしょう。

【郊外化と地域住民の助け合い】

現代の日本では、郊外化によって、人々が地域の人々と助け合わなくなってきたと言われています。郊外化は、例えば居住地と職場とが離れていることを意味します。職場が遠

い人ほど、居住地域から離れたところで一日の大半を過ごすようになり、そのことが地域の人々との交流機会の減少につながります。こうして、地域における人々との助け合いが低下してしまうと考えられるのです。そこで、松本市でも同様のことが言えるのかどうかを検討することにしました。郊外化の指標として通勤時間を用いることにし、地域内の人々の助け合いに対して通勤時間がどのように、またどの程度影響しているかについて検討しました。

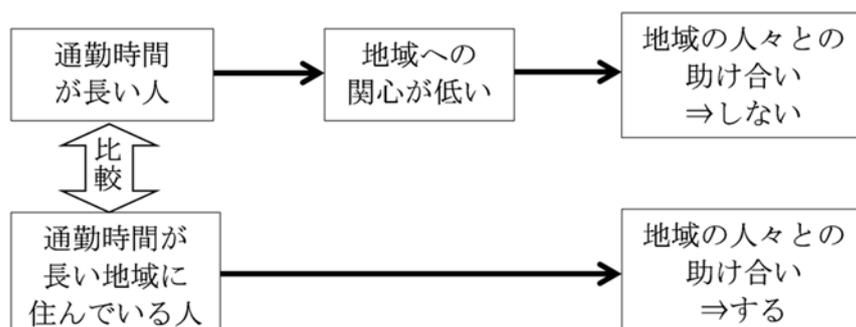


図3 通勤時間（郊外化）と地域の人々との助け合い

分析の結果、松本市では、通勤時間と地域における人々との助け合いの程度とは無関係であることがわかりました。しかし、より詳細に言えば（図3）、個々人でみると、通勤時間が長い人ほど、地域に対する関心が低く、地域における助け合いをしていないのですが、居住地域単位でみると、通勤時間が長い人が多い地域ほど、助け合いをしているのです。つまり、個々人の効果と地域の効果が相殺され、通勤時間と助け合いとが、一見すると無関係にみえたというわけです。

では、なぜ個々人と地域では逆方向の結果になったのでしょうか？ 松本市の場合、通勤時間が長い地域とは、市街地から離れた旧村町部であり、そのような地域では、昔からの地縁的なつながりが強く、日常的な交流があるのです。一方、一般に通勤時間が長い人は、日常生活を居住地域から離れた場所で過ごす可能性が高く、地域に対し無関心で地域住民と交流しない傾向があるのです。これらを合わせてみると、松本市郊外のように、もともと強いつながりが存在する地域においては、たとえ通勤時間が長い人でも、強いつながりのために、地域に無関心にはなれず、地域の人々とある程度は助け合うことになると考えられるでしょう。大都市郊外のベッドタウンと、松本市郊外の旧町村部とは、このような点で違っているのです。

【投票行動の記憶の不正確さ】

この調査では、2000年以降の長野県知事選挙において、どの候補者に投票したかを伺いました。しかし、分析してみると、皆様の投票の記憶と、報道された選挙結果はあまりにも食い違いが大きいことがわかりました。

表1にみるように、人々の投票の記憶は、一般に「勝ち馬に乗る」ように偏っているようです。しかし、2006年の村井氏と田中氏の激しい一騎打ちになったような場合に限り、自分がどちらに投票したか、記憶は正確に残っているようです。

表1 歴代の知事選挙の当選者と次点者の得票率と本調査の回答者の投票割合

年度（候補者数）	順位	実際の投票%	本調査回答者の投票%
2000年（4）	当選	49.1	92.7
	次点	39.5	5.8
2002年（6）	当選	64.3	94.2
	次点	31.8	4.4
2006年（2）	当選	53.4	54.0
	次点	46.6	46.0
2010年（3）	当選	39.9	86.1
	次点	39.3	4.4
2014年（3）	当選	84.2	89.8
	次点	14.3	10.2

【外国人との共生志向を生み出す要因】

最後に、どのような人が、外国人と共生しようとする志向性が高いのかを検討しました。その結果（図4）、他者一般に対する寛容性（一般的寛容）が高い人、他者一般に対する信頼（一般的信頼）が高い人、外国人に対する信頼が高い人、外国人と友人や家族として付き合いがある人、外国人は日本文化に同化すべきだと考える（同化主義）人、人々が独自の文化を守ってよいと考える（多文化主義）人ほど、外国人との共生志向が高いことがわかりました。反対に、年齢が高いほど、排外意識が高い人ほど、共生志向が低いことが明らかとなりました。

この結果は、外国人との共生を実現させるためには、外国人を受け入れる段階の「寛容」だけでなく、一步踏み込み、対等な立場として「信頼」し合うことの重要性を示しています。このことは、外国人との接触機会の中で、外国人を見かけるといった受動的な接触や、あいさつをかわす程度の接触には効果がなかったのに対し、外国人と友人または親戚関係にある能動的な接触のみが共生志向に正の効果があったことから読み取れます。「共生」を実現するためには、外国人が地域にいることを知っているというだけでなく、積極的に親密な関係を築いていこうとすることが重要であることが明らかになりました。

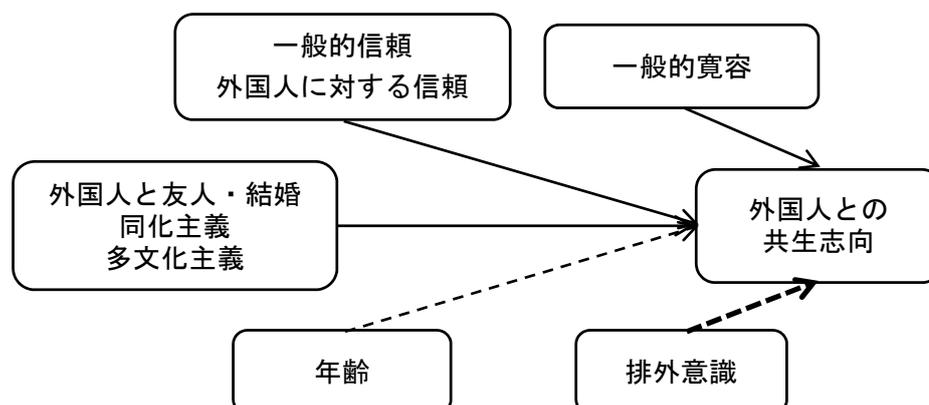


図4. 外国人との共生志向の規定因

実線は正の、破線は負の関係を表す。線の太さは関係の強さを表す。